

「小学生でも国を変えられる幸せな国」コスタリカとは」

井手 公正 （ジャーナリズム分野修士2年）

“開発途上国の中で最も幸せな国”コスタリカのことができて、終始感激し、お話が楽しくて、まだずっと聴いていたいと思う、そのようなお講義を本当にありがとうございました。

様々な実績や経験を重ねながら 78 カ国を取材されたジャーナリスト伊藤千尋さんのお話は、説得力があるだけでなく、とても魅力的に感じました。

今回のご講義を聴かせて頂き、コスタリカなど世界に目を向けてみると、僕がこれまで学校で習った事、親から教えてもらってきた事、仲間内で話してきた事、得た情報、日本では常識と言われ教え込まれてきたことが、世界では通用せず恥ずかしいことも多い、そのような日本に生まれ育ってきたことを再認識してしまいました。

僕は外国の事も日本の事も、まだまだ知らない事が多いですが、日本人は全体的に閉鎖的とも表現出来る人種な上に、狭い島国で人口が急激に増えました。結果的に、ストレスが必要以上に多くなり、勝負したがる人が増えたのは事実で、必然的とも言える社会現象が今起きているような気がしました。

だからこそ、常に、コスタリカのように、子供から大人まで国民が声を上げて、その声を子供から大人が拾い、多数決や儲け話ではなく必要な問題に対しては対応策を根っこ、つまり憲法からも見直す責任が僕にも誰にもあるんじゃないかとさらに強く感じました。

それを実現している様なコスタリカという国が本当に羨ましく思いました。

日本が学ぶべきことがあるのではないかと感じています。

僕は、今日みなさんが行かれた居酒屋に恐らく行けません。行けたとしても、トイレや段差問題で僕も介助者も互いに負担が大きいことが想像できます。そんな国で、この2年半、車椅子生活をしてきました。居眠り運転の大型トラックにぶつけられたことから、人生の途中で突然、トイレのコントロールが出来なくなりました。車椅子に座ったまま外に出てみると、まるで別の夢のような世界(地獄)でした。みんなと一緒にいた所に「行けない・入れない・行けてもトイレが使えなかったり入れない」と、2年半この辛さにあえて慣れずに辛抱してきました。

障害者割引や優遇措置をとられているものもあります。生まれてからの25年間は車椅子が必要な身ではありませんでしたので、車椅子で行けない所の魅力や大切さも承知のつもりです。そこで3つご質問させて頂きたいのですが、

- ① スタリカの車椅子利用者は幸せそうに暮らしておられますでしょうか。
- ② 1人から15%の同志を得るためのアドバイスなどを頂けませんでしょうか。
- ③ 不慮に身体(精神も含む)にハンディキャップを抱えてしまった、これから誰もが抱えてしまうかもしれない人間が社会生活において、憤りや不便を感じていることがある場合、日本で、どのような声のあげ方をすると、憲法改正などイノベーションが起こせそうでしょうか。そもそも、声をあげるべきでしょうか。

もっと聴きたい、また聴きたい、誰かに聴かせたいと思うようなご講義、本当にありがとうございました。

お話くださいました伊藤千尋先生、先生のお話を聴けるようにセッティングして下さったゆきさんや大学関係の方々にも感謝致します。